

## 行為は出来事ではなく、 プロセス（耐続する四次元的対象）である

鈴木 雄大 (Yudai Suzuki)

国際武道大学

---

行為論における標準見解では、行為は出来事 (event) という存在論的カテゴリーに属する。ところが最近、行為を出来事とは区別されたプロセスだとする立場が盛り上がりつつある。本発表は、そうした行為は出来事かプロセスかに関する議論を整理しつつ、行為をプロセスとする独自の議論を提示する。

一般に出来事は、車のような物質的対象とは異なり、時間的に延長することで時間の中を持続する。たとえば正午から午後 2 時までの間に車が燃えるという出来事は、正午から午後 1 時までの間に車の前部が燃えるという時間的部分  $p_1$  と、午後 1 時から午後 2 時までの間に車の後部が燃えるという時間的部分  $p_2$  によって構成されることで持続する。そして正午から午後 1 時までの燃焼はおとなしかったが、午後 1 時から午後 2 時までの燃焼は激しかったという変化は、時間的部分  $p_1$  がおとなしいという性質を、時間的部分  $p_2$  が激しいという性質を直接（無時間的に）もつことによって説明される。つまりそれぞれの性質は異なったものによってもたれるのである。これに対して、車という物質的対象が春にはピカピカだったのに冬にはボロボロになったとき、ピカピカという性質やボロボロという性質は車の異なった時間的部分によってもたれるのではなく、異なった時点における同じ車によってもたれる。すなわち車は耐続する (endure)。(そのように考えない四次元主義もあるが、本発表は物質的対象に関する四次元主義と三次元主義の論争には踏み込まない)。

これに対して発表者は、H. Steward と共に、車が燃えるという同じ一つのことが、正午から午後 1 時まではおとなしいという性質をもち、午後 1 時から午後 2 時まででは激しいという性質をもつと考えることもできると主張する。そしてそのような正午から午後 2 時まで耐続する同じ一つのことを「プロセス」と呼ぶ。プロセスも出来事も、生起 (occurrence) という高次のカテゴリーに属するが、プロセスは変化しうるのに対し、出来事は変化しえない。そして行為の存在論的カテゴリーとしてはプロセスの方が適切であることを発表の最後で示す。